

## ある決断

### 第21期 北田 一

昭和39年4月、千歳高校に入学し、新しい部活動を模索していた私は、ラグビー部に入部する事を決めた。木造の校舎と中学のそれとは違う広い赤土のグラウンドと両サイドに高くそびえるゴールポストに新鮮な感動を持った。入部してブロック建ての部室に行き、先輩達の使い古したジャージ、パンツ、スパイクを貸してもらい、練習に参加し最初におどろいたのは、3年生がいないという事であった。ラグビーのラの字も知らない1年生を2年生はよく教えてくれた。毎日の辛い練習を終え、ボールみがきをしている時、『夏合宿をすぎれば、信じられないくらい練習が楽になるよ。』と、よく言われ、夏合宿まで頑張ろうと思った。

夏合宿は栃木県日光市で一週間行われた。朝食前のランニングから午前の練習、午後の練習、夜のミーティング、就寝前の個人練習と、まさに地獄の一週間であった。合宿終了後、先輩の言われた言葉どおり、毎日の練習が信じられないくらい楽になった。

秋の全国大会東京予選会は2回戦で敗退した。翌年春の新人戦大会でベスト8にのこり、関東大会出場を決定した。

この頃、従来のピンクとグレーの試合用ジャージから、青地に赤の2本線のジャージに新調された。

関東大会は、神奈川県平塚市で行われ、高崎高校と対戦し、14-0で勝った。この当時の関東大会は、優勝を決めるトーナメントではなく、この一試合のみの親善試合の趣きがこかった。

私達も2年生となり、新入部員もふえ夏合宿にむけ

て練習にも熱が入り、2・3年生との関係も昨年より更に親密度を深め、チームとしても最強の時代をむかえていた。

この年の夏合宿は、長野県菅平で、一週間行われた。合宿2日目、2年生数名が午後の練習後、倒れ、練習を休むという事があった。この合宿では、他校との交流がさかんで、練習試合が昨年よりかなり多かった。

秋の全国大会東京予選会は4回戦で敗退し、3年生の退部と、新キャプテン北田が決まった。

7人制大会は私達上級生を中心としてある程度自信をもってのぞんだが、早々に敗退し、春の大会へ向けて練習に熱が入って来た時、3年生全員で会合が持たれる事になった。

その日、小川宅に集まったのは、北田をはじめ全3年生8名であった。

小川清正。チームのプレースキッカーをつとめ、攻守両面の右バックローをやっていた駿足のサブ・キャプテン。

山岸芳夫。足の早さはチーム一。3年生のなかで最初にゲームでトライを決めた不動のウイング。

北村五男。先輩のぬけたスタンドオフのポジションを不断の努力とキック力で獲得したバックスリーダー。

清水康弘。1・2年は1番。3年になって3番となり、スクラムの要をつとめたスペシャリスト。通称デカシミ。

清水正。フォワードのポジションすべてをこなせる貴重な存在。主にフッカーをつとめた。通称チビシミ。

寺山洋一。ケガに泣き、その度に立ちあがってきた不屈の男。センターとフルバックをつとめた。

浅倉文夫。2年生の練集中、野球部の打球が頭にあ

たり、現役を退き、マネージャーとなる。チームをかげからささえた功労者。

そしてもう一人。この会合には欠席したが、佐々木雄祥。一度、退部したが、2年にマネージャーで復部。現役時はスクラムハーフ。

この会合で今後の部活動のあり方が話し合われ、それぞれが、家庭の事情までをも吐露する会議となった。その日結論は出ず、後日、私は決断し、3年生全員の夏合宿前の退部を決断し、OB各人宛に書面を作成し送付した。この決断は、18歳の若者が彼らなりに悩み、協議し、他人の助けをかりず、実行された。

春の大会、敗戦が決まり、3年生の公式戦が終了した。

郵送した退部通知はOB会等に大きな波紋を広げ、OB会と3年生の会合が持たれた。この会合で3年生はCRCのバッチをはずし、退部が決定した。

## （ 第 21 期 同期生からのことば ）

千歳を卒業して30年。ラグビーを見た日の夜は、当時のゲーム、合宿の思い出がよみ返る。何としつこく忘れないものか。

山岸芳夫

コンクリートの様な硬いグラウンドでのセービング練習の悲惨さを思い出す。ピフテキが治る間が無かった。

寺山洋一

千歳のラグビーで教えられたことが大学ラグビーで大変役に立ち感謝している。今でもラグビーとは離れられずにいます。

小川清正